

O-8-11

クラウド型医療機器管理システム「MAViNCloud」の使用経験

秋田赤十字病院 医療技術部 臨床工学課

○はたけやま たくや 畠山 拓也、松田 光喜、熊谷 誠

【はじめに】近年、様々な分野でデータベースのクラウド化が行われており、今回我々は「MAViNCloud (株) 電算」を使用し、若干の知見を得たので報告する。
【方法】医療機器管理システム「CEME (無償版)」から「MAViNCloud」に移行し、1台帳の構成、2保守点検情報、3貸出返却操作、4その他の項目について比較検討した。
【結果】1台帳の構成に関してはMAViNCloudは機種別一覧が基本でパソコン操作に不慣れなスタッフでも検索しやすい構成になっている。2保守点検情報に関しては、CEMEはあらかじめ規定された点検項目に加えテキスト入力で機種毎の点検項目を入力していたが、MAViNCloudは機種毎に点検項目のテンプレートを作成することができた。また、点検・修理伝票をPDFで台帳に貼り付けることができた。3貸出返却操作は、どちらのシステムもタッチパネルを用いたため、難なく移行できた。4その他の検討内容として、システム全体を比較した。MAViNCloudはクラウド型システムのため、インターネット接続が可能な端末があればどこからでもアクセス可能であった。また、管理番号の変更に伴い新たにバーコードが必要となり張替えの手間がかかった。
【考察】結果1から3の主に操作面に関しては、操作者がシステムに慣れることで問題なく運用できたと考えられる。結果4のシステム全体に関しては、他のスタッフがシステムを使用中でも別の端末からシステムを使用することができ、ネットワーク環境があればどこでも利用可能であるという手軽さがあると考えられる。また、成長型のクラウドシステムのためユーザーの意見を反映したバージョンアップにより、使いやすさの向上や新機能の追加が可能と考える。
【まとめ】「MAViNCloud」について、「CEME (無償版)」と比較検討を行った。各検討項目においてMAViNCloudは劣ることのないシステムであると考えられた。

O-8-13

医療機器安全管理責任者としてわかりやすい情報伝達を目指して

旭川赤十字病院 医療技術部 臨床工学部門

○かきた くにひこ 脇田 邦彦、松本 美和、小野寺哲兵、増子 真人、前田 愛梨、黒田 恭介、細矢 泰孝、白瀬 昌宏、太田 真也、中木久美子、貝沼 宏樹、佐藤あゆみ、奥山 幸典、飛鳥 和幸、陶山 真一

医療機器安全管理責任者の責務としてメーカーから発出される自主回収情報や院内のリスクマネジメントに関する情報を職員へ周知しなければならない責任があり、関係職員へ実効性のあるレベルで周知することはかなりのノウハウと労力を必要とする。メーカーからの自主回収情報にはリスクだけを先にアナウンスして、解決策が後手になることもしばしばあり、不具合のリスクが解消されるまでの間に発生する危険性のある不具合内容や対処方法をうまく伝える必要がある。しかし、メーカーからの周知書類は我々臨床工学技士が読んで目的を得ない内容のものも少なくない。中には英文を直訳したようなものもあり、難解どころか長文な書類をそのまま配布しても読んでもらえず、医療機器安全管理責任者の責任を果たすことにはならない。当院ではわかりやすい情報伝達を心掛けている。まずは読んでもらえなければリスクを理解してもらえないので長文や的を得ない文章、職員には必要のない機器の承認番号やコードナンバー、技術的な英数字文字は削除して独自に編集したものを配布するようにしている。基本はわかりやすく要約してA4用紙1枚に収めることと興味を持ってもらえるように画像を多用したものを作成している。さらに周知する必要のない部署へ周知することは逆に混乱を招く恐れがあるため、機械的に全部署へ配布するという手法ではなくいかに必要な部署へ効率的に周知するかを考えることも重要である。そしてメーカーへはできるだけ院内で配布できる内容の周知書類を提供してもらえるように啓蒙する必要があると考える。

O-8-15

BSC(バランスト・スコアカード)導入におけるスタッフの意識改革

大分赤十字病院 歯科口腔外科

○くすき あやの 葛城 綾乃、奥野 美香、首藤 素子、木村ひとみ、諫山 美鈴、森島 貴史

【緒言】BSC(バランスト・スコアカード以下BSC)は企業のビジョン・戦略にどのように影響し業績に現れているのかを可視化する業績評価手法であるが、医療業界でも営利的だけでなく「経営の質」と「医療の質」の両面からのマネジメントが必要である。
【目的】当院でも平成26年度からBSCが導入され、1年に1度当年度の戦略マップを元に各部門のスタッフ間で戦略的目標や行動計画を設定していく中で導入当初と現在を比較し、スタッフ間の意識変化の調査を行なったので報告する。
【方法】平成27年度・28年度始めにBSCにおける病院の戦略マップを元に各部門の戦略的目標、重要成功要因、実績値、目標値、行動計画を作成し、各年度末に到達度の検討と平成28年度末にBSC導入による意識改革に関するアンケート調査を行った。
【結果】スタッフ6名(歯科技工士・歯科衛生士・歯科助手)の回答率は100%であった。平成27年度のBSCと比較して平成28年度は重要成功要因、実績値、目標値、行動計画をより具体的に作成できるようになった。また、BSC導入前はBSCについて5名が知らなかったが、BSC導入後は「業務における意識改革があったか」、「BSCの内容を理解し日常業務を行なっているか」の問いに6名全てが「はい」と回答し、「目標値の達成はできたか」の問いでも6名が「概ね達成できている」と回答があった。
【考察】BSC導入後3年が経過し、病院の経営戦略が明確になることで各部門の戦略的目標を立案しやすくなり目標値を設定することで個人が意識して業務を行うようになった。またスタッフ間のコミュニケーションも導入前と比較して改善され、問題点をすぐ解決できるようになった。今後も継続したBSC作成と振り返りを行い、個人のモチベーション向上に努めた。

O-8-12

赤十字キャンペーンにおける臨床工学課のブース展示 ー体験型医療機器展示ー

釧路赤十字病院 医療技術部 臨床工学課

○さいとう たかひろ 齊藤 貴浩、佐久間 寛、章 純樹、村上 貴大、三島 諒祐、神保 和哉、能代谷 翼、熊谷 弘弥、尾嶋 博幸、倉重 諭史

【はじめに】日本赤十字社では5月を赤十字運動月間として、全国の赤十字施設において様々なイベントを開催している。当院においても市民を対象に赤十字キャンペーンを開催し、様々なイベントの他、それぞれの職種の専門性を活かした展示ブースを展開し地域住民に開放している。臨床工学課はH28年度より臨床工学業務に関連した展示ブースを設けて本格的にキャンペーンに参加している。その内容と結果、今後の展望について報告する。
【内容】展示ブースを設けるにあたり事前に課でミーティングを行い、『子供から大人まで実際に医療機器に見て、触れて、体験可能なブース』を目的とし、原則として『市民が医療機器に触れる上で確実に安全である事』とした。展示初年度は実際に医師が内視鏡外科手術を練習するためのトレーニングボックスを準備し、来場者にゲーム感覚で医療機器に触れて頂いた。翌H29年度はさらにVer.UPし、前年同様の内視鏡外科手術体験に併せ、最新の内視鏡外科手術装置である3D内視鏡装置、4Kモニタを展示し相乗効果による来場者数の増加を狙った。
【結果】H28年度は全来場者数約450名に対し、来場者72名。H29年度は全来場者数約500名に対し、内視鏡外科手術体験88名。3D・4K体験100名(計188名)の来場と前年度を大きく超える結果となった。多くの来場者が訪れ、特に子供には好評だった。H29年度にはリピーターと思われる来場者も多く見られた。
【展望】市民に赤十字を身近に感じてもらうべく臨床工学課として今後も継続して赤十字キャンペーンに参加し、さらには臨床工学技士という職種をアピールしていく。参加した来場者がいつか赤十字に、釧路に医療従事者として戻ってくる事を願ってやまない。

O-8-14

当院におけるペースメーカ植込み患者の手術対応について

旭川赤十字病院 医療技術部 第一臨床工学課¹⁾

旭川赤十字病院 医療技術部 第二臨床工学課²⁾、旭川赤十字病院 医療技術部³⁾

○おた ますや 太田 真也¹⁾、貝沼 宏樹¹⁾、松本 美和¹⁾、小野寺哲兵¹⁾、増子 真人¹⁾、前田 愛梨¹⁾、黒田 恭介¹⁾、細矢 泰孝¹⁾、白瀬 昌宏¹⁾、佐藤あゆみ²⁾、奥山 幸典¹⁾、飛鳥 和幸²⁾、陶山 真一¹⁾、脇田 邦彦³⁾

【はじめに】当院におけるペースメーカ植込み患者の手術対応においては、平成22年9月より手術対応マニュアルを作成し、臨床工学技士が対応している。当初はメーカー立ち合いのもと、設定変更の対応を行っており、DOOやVOOなどの固定レートに設定変更することが多かった。平成24年度よりメーカー立ち合いをせずに臨床工学技士のみで対応するようになり、現在までの手術対応についてまとめたので報告する。
【対応状況】現在、不整脈治療専門臨床工学技士2名を中心に不整脈治療関連業務をおこなっている。平成24年1月から平成29年6月までのペースメーカ植込み患者の手術件数は153例で、そのうち設定変更を行った手術は61例で、92例は設定変更を行わずに手術をすることができた。設定変更を行わなかった場合は、執刀医又は麻酔科医師に手術中でも設定変更可能である事を伝え、すぐに対応できるよう体制を整えている。現在までに設定変更を行わずに手術を行った症例に関しては、問題なく手術が行っており、臨床工学技士が対応することにより、ペーシング率・術式・手術部位なども考慮し、術前に設定変更を行わない手術が増えた。
【まとめ】臨床工学技士のみで対応することにより、患者に合った設定で手術が施行できると思われる。

O-8-16

看護師との協働に向け看護補助者業務の再構築に取り組み

旭川赤十字病院 看護部

○いわた かつら 岩間 桂、有馬 真琴、谷口 千春、長谷川浩美、桜井 美貴

目的：近年、看護補助者（以下補助者）が看護師と協働し、効率・効果的な質の高い看護サービスの提供が求められている。自部署は循環器センターであり、日々の複雑な業務の中で部署の特殊性や補助者の役割を明確化し、「看護師が看護に専念できる環境づくり」「働きやすい環境づくり」を目指した業務改善が課題であった。そこで、新人補助者の配置や他部署からの異動者の受け入れを転機とし、看護師と補助者との協働を目指した業務改善への取り組みの実際を報告する。
取り組み：看護師と協働する為に、様々な状況に対応可能にする補助者業務の整理や看護師が看護に専念できる環境整備に取り組んだ。感染管理や動線を重点とした物品整理、薬品整理等、他部署や他部門の協力を得て改善した。また、補助者の役割を考える機会をもち、お互いに尊重し合えるスタッフ間のコミュニケーションを補助者側から積極的に行った。結果と考察：1.補助者業務のタイムスケジュールを見直した事で業務の効率化に繋がった。2.環境整備では物品の使用目的をグループ化し大々的に収納棚の配置換えした結果、動線が改善され機能的になった。3.部署の特殊性を理解する事で、自分達に求められている事を考えるようになった。4.複雑な状況の中、優先順位を考慮し、補助者間で励まし合い協力できた。5.目標を立案する事で成功するイメージを持つ事で、改善していく経過の大切さを実感できた。6.多忙な看護師の立場や気持ちを理解し行動する事で「ありがとう」の言葉が多く聞かれるようになり、スタッフ間の信頼関係構築に繋がった。今後も看護師の業務負担軽減を目指し、効率的な補助者の勤務体制の見直しを看護師長、看護部長と共に検討し、更なる看護サービスの向上を目指していきたいと考える。